

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

BEL CICLISMO!

* 素晴らしき自転車レース① *

谷口 和久

●極私的イントロ

近ごろテレビを見る機会がめっきり減ったせいかもしれないが、自分の中で「時代と一体となったスポーツ選手」と言える存在がいなくなって久しい。たとえイチローが WBC (ワールドベースボールクラシック) で優勝に大きく貢献したり、カズがサッカー日本代表の選から漏れたといったニュースを聞いても、非常に遠い国のできごと、あるいは遥か昔のニュースであったかのように心の中を引っかかることなく過ぎ去ってしまう。次から次へと情報のあふれかえる現代社会の弊害かもしれない。

しかし、かつて—その「かつて」をいつに定義するかは人それぞれだろうが—は確実に「時代と一体となったスポーツ選手」というのが存在した。70年代に物心ついた自分にとっては何と言っても王貞治であり、もう少し前の幅広い世代の人たちにとっては長嶋茂雄であろう。なにも野球に限らず、また国内に限らず、そういった「時代を熱くする男たち」が、比較的醒めた目で物事を見がちな自分の中にも存在した。バスケットボールのマイケル・ジョーダン、アメリカンフットボールのジョー・モンタナ、ボクシングのマイク・タイソン。欧州に目を向ければ、F1のアラン・プロストにアイルトン・セナ、サッカーのベッケンバウアー、スキーのアルベルト・トンバ。いずれも単に「強い」、「常に勝利する」というだけでなく、なにかしら「美」や「生き様」といったものを我々に示してくれる選手たちであったと感じている。

「時代と一体となったスポーツ選手」のあり方は、当然その時代時代によって変わってくるだろう。王、長嶋といったところは高度成長期の日本とその姿が重ね合わされるわけであり、それより前、敗戦から立ち上がりつつある時代には水泳で活躍した「フジヤマのトビウオ」古橋廣之進であったりするのであろう。



【ファウスト・コッピ】

●“Campionissimo”と呼ばれた男

長い歴史を持つスポーツというのは、いずれかの時代にエポックメイキングな「時代と一体となった選手」を持っているものであるが、イタリアをはじめとしたヨーロッパにおける自転車競技も御多分に洩れない。その最上位に君臨するのが“Campionissimo”ことファウスト・コッピである。“Campionissimo”とは、“Campione (イタリア語で「チャンピオン」の意)”に最上級表現“-issimo”を付けられた、彼を讃える称号である。

“Campionissimo”ファウスト・コッピ（Angelo Fausto Coppi）は、日本と同様、敗戦国であったイタリアにおいて、その政治動向を左右するほどの熱狂的関心を持って受け入れられた選手であり、おそらく今後、彼のような選手は現れることはないであろうと言われる。日本において王や長島がそうであるように。彼が選手生活を送ったのは第二次大戦をはさんだ約20年間であり、1919年生まれのコッピは1960年にマラリアのため、その40年の短すぎる人生をあっけなく閉じている。すでに、その死から50年がたつていながら、いまだにその名が人々の口に上り、自転車の広告にその走る姿が使われ、自転車のブランドにその名が冠されるほどの人気である。いや、「人気」というより、むしろ「崇拜」といったほうがふさわしいほどの扱いである。

当然ながら、筆者はファウスト・コッピの走りをリアルタイムで見たことはない。しかしながら今でも、雑誌やテレビで自転車に関する情報に触れている限り、遠く離れた日本でも彼のことを認識せずにはいられないほど、“Campionissimo”のオーラは強烈である。実際、写真で見る彼のライディング・ポジションは本当に美しい。腕と足は長く、胴体が短くずんぐりとしてやや猫背であり、普通に二本足で立っている写真を見るとちょっと不安定な印象を受けるが、自転車にまたがると、とたんに自転車と肉体が黄金比バランスを描くのである。



【ファウスト・コッピの見事なフォーム】

歴史に残るコッピのキャリアは、1940年のジロ・ディ・イタリアにおける総合優勝に始まる。しかし、時代は彼から自転車を取り上げた。徴兵され

たコッピは北アフリカ戦線に従軍し、そこで捕虜となって1945年までイギリス軍の収容所に入れられてしまう。戦後のコッピ—当然ながら引き揚げ直後の彼は衰弱しきっていたという—は、失われた時代を性急に取り戻すかのように、次々と勝利を勝ち取っていく。戦後、ジロ・ディ・イタリア総合優勝が4回（1947、1949、1952、1953）、ツール・ド・フランス総合優勝が2回（1949、1952）。このリストをご覧頂いておわかりのように、1949年と1952年には、同じ年にジロ・ディ・イタリアとツール・ド・フランスという二大レース（いずれも約4000キロを1ヶ月近くかけて走破する過酷なレース）を制したのである。

彼は、もちろん才能のある偉大な選手であったが、さらに、当時まだ様々な旧弊にとらわれていた自転車レース界に科学的トレーニングやチーム戦略といった新風を導入したことで知られる。

●合理的革新家コッピ

ここで、いったんコッピから離れて、美術や食文化といった「一般のイタリア好き」であるコレンテ読者の皆さんに、“自転車のチーム戦略”について説明しておきましょう。

「自転車レース」というものを見たことがない、あるいは、見たことがあるとしても詳しくは知らないという方には、それがマラソンと同じように完全な個人競技、つまり「ヨーイ、ドン！」でスタートして各選手がそれぞれ他の選手と個人対個人で競うものであるように思われることだろう。しかも、レース結果では一人ひとりの着順が出るので、なおさらである。しかしながら実のところ、自転車レースは非常に高度な—別の言い方をすれば、はたから見ても非常に分かりにくい—団体競技なのである。通常、プロのレースには5～9人のチーム単位で参戦するのであり、個人単位で参加することはない。各チームは「エース」と呼ばれる優勝を狙えるような強豪選手と、「アシスト」と呼ばれる「エース」をサポートする選手から構成される。では「アシスト」はどのように「エース」をサポートするのか。その一番の役割は、走行中「エースの風よけ」となることである。プロのレースでは、コースにもよるが、通常、スタートからゴールまでの平均時速が30キロ後半から、場合によっては50キロ近くになる。要は（ありえないことだが、完全無

風状態と仮定しても)常に風速30~50キロ/時の風圧を受けて走らなければならない。これはまるで自転車の後ろにタイヤをくくりつけて引きずっているかのような大きな負担となるわけで、風を受けて先頭を走っている場合と他の選手の後ろに付いている場合とでは、疲労の蓄積量がくらべものにならないのである。このため、アシストは自チームのエースのための風よけとなり、自らの着順(場合によってはゴールすることすら)を犠牲にし、身を粉にしてエースの前を引くのである。そしてエースは勝負どころ—それはゴール直前であったり、最後の登り坂であったり—で、他チームのエースとの最後の勝負に出るのである。そして、このような戦術をシステムティックに仕上げたのが「合理主義者」コッピにほかならない。

このように書くと、「コッピというのは要領のいい奴だったんだな」と思われがちであるが、要領のよさでその名が残ったわけではもちろんない。むしろ、重要なステージ(区間)では、100キロ、200キロという長距離を単独で逃げ切り、他を圧倒するかたちで勝利をものにしていた。ことに第二次大戦後、敗戦国イタリアにあって、その走りは国民に希望と誇りをもたらしたのである。同じように敗戦国であった日本で「フジヤマのトビウオ」の活躍がそうであったように。

●神話創生

日本のラジオ放送黎明期の名セリフとして「前畑ガンバレ！前畑ガンバレ！前畑ガンバレ！！」というのがあるが、イタリアにおけるそれは次のようなものである。

“Un uomo solo è al comando; la sua maglia è biancoceleste; il suo nome è Fausto Coppi”

「ひとりの男が単独でレースを支配しています。そのウェアは白と空色。その名はファウスト・コッピ」。



【独走するファウスト・コッピ】

これは、1949年のジロ・ディ・イタリア最大の勝負どころと見られた第17ステージ当日、中継アナウンサーの開口一番の実況である。伊・仏の山岳国境を越える254キロのステージ。誰しも最後の登りとなるセストリエーレ峠まで動きはないだろうと思っていたところ、ラジオをつけたら、いっせいにこのアナウンスが飛び込んできたのである！中継の始まるはるか前から単独で飛び出していたコッピに、ラジオの前の聴衆は歓喜。その後の中継はひたすらコッピの独走を伝えるものであり、聴衆たちは手に汗にぎりながら、まさに「コッピとともに」ペダルを回している気持ちであったろう。ゴールまでの192キロを一人で走り切ったコッピは、ラジオの向こうで耳を傾けるイタリア国民の心の中に神話を作り上げたのである。

[参考資料]

『ジロ・ディ・イタリア 峠と歴史』(安家達也,未知谷,2009)

『イタリアの自転車工房物語』(砂田弓弦著,八重洲出版,2006)

(当館スタッフ)

イタリア発月刊日本語新聞

COMeVA!
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

VIVA IL CINEMA ITALIANO !

第22回『カラヴァッジョ 天才画家の光と影』 CARAVAGGIO

松島 征

だいぶ前のことですが、デレク・ジャーマン監督『カラヴァッジョ』CARAVAGGIOなる映画作品をビデオで見たことがあります。「ベルリン映画祭銀熊賞」を受賞したという評判のわりには、マニアックで独りよがりな映画でした。画家の生きていた時代がまったくといっていいほどに描かれていない。ある人物などは背広を着てネクタイをしめて出てくる。画面には現代風の小道具(自転車、自動車、電卓、タイプライターなど)が次々に登場。室内のシーンばかりで、野外のシーンがない。カラヴァッジョが描いたはずの絵画作品が一点も出て来ない。製作にほとんど金をかけていない、といった体の「ないない尽くし」の映画作品でした。ただ、男性のヌードはふんだんに出てきて、カラヴァッジョが同性愛の画家であったことを印象づけようとする意図だけは見え見えの作品でした。なにやら意味ありげではあるが、じつは空虚な映像の連続に正直なところうんざりして「金を払ってまでこんな映画を見せられるのはたまらん」と思ったものでした。



「マリオをモデルに・・・。」

このような鬱憤を晴らしてくれたのが、今回新たに公開された映画『カラヴァッジョ 天才画家の光と影』(2007年、イタリア・フランス・スペイン・ドイツ合作)です。綿密な時代考証に立ち、同時代の思

想的・政治的な背景なども克明に描かれている、見応えのある作品でした。たとえば、ローマのサン・ルイジ・デイ・フランチェージ聖堂(彼の代表作が展示されている)、サンタンジェロ城、ファルネーゼ宮殿など、マルタ騎士団の本拠地のマルタ島、シチリア島の美しい風景などが実写で見られるのはうれしいことです。カラヴァッジョの描いた絵画作品も(たとえレプリカとはいえ)ふんだんに用いられ、この映画で用いられているカラヴァッジョの絵画作品は、イタリア文化財局長や著名な美術史家の監修を受けているとのこと。



「果物籠をもつ少年」

この映画の主人公の画家の名「カラヴァッジョ」は彼の本名ではない。本名は Michelangelo Merisi(ルネサンス時代の巨匠ミケランジェロと同じ名)、1571年ミラーノ生まれ、1610年にポルト・エルコレで亡くなっています(弱冠38歳)。今年でちょうど没後四百年になるのです。1577年、北イタリアでペストが大流行したため、メリージー家は疫病を避けるためにカラヴァッジョという、ミラーノ東部の町に移住しました。「カラヴァッジョ」という画家の通称はこの地名に由来します。

彼は、イタリア絵画にドラマティックな明暗法とリアルな描写の技法を導入することにより、バロック様式を切り開いた先駆者である、と今日では見なされています。カラヴァッジョは、その生前はイタリアで最も高名な画家だったらしいのですが、没後急速に「悪しきリアリスト」と見なされてその

評価が下がりました。そんな彼が「イタリア最大の画家」として復活したのは20世紀になってからのこと。彼の作風は、のちのベラスケス、レンブラント、ルーベンス、フェルメール、ラ・トゥールなどスペイン・フランス・フランドルの巨匠たちの絵に多大な影響をもたらしたと云われているほどです。その一方で、この無頼の画家は「呪われた絵師」とも呼ばれ、その生涯は血と暴力にまみれていました。実際、殺人の罪を犯したために死刑判決まで受けて、その刑を逃れるためにナポリ、マルタ、シチリアを転々とする波乱の後半生を送っている。その意味では、フランス15世紀無頼派の詩人フランソワ・ヴィオンを彷彿とさせるものがあります。

この映画では、いくつものカラヴァッジョの絵画作品の創作のプロセスが描かれているのですが、いくつかの代表的なものを年代順に挙げておきましょう。



「ロレートの聖母」

1) イタリアで最も早い時期に描かれた静物画と見なされている〈果物籠〉(ミラーノ、アンブロジア

ーナ絵画館蔵)をめぐるエピソード。カラヴァッジョは親友のマリオ・ミニエーティとともに、この絵をもってダルビーノ工房に自分を売り込みます。

2) 馬にはねられ大けがをしたカラヴァッジョを献身的に介護するマリオ。そのマリオをモデルにして描いたのが、〈果物籠をもつ少年〉(ボルゲーゼ美術館)であり、〈トカゲに噛まれた少年〉であり、〈女占い師〉であり、〈リュート弾き〉です。いずれの作品にも濃厚な同性愛の雰囲気漂っているために、後世カラヴァッジョは「男色の芸術家」と見なされることになる。その点をとくに強調したのが、最初に挙げたデレク・ジャーマン監督作品『カラヴァッジョ』です。

3) カラヴァッジョの最初の自画像と目される〈病めるバッカス〉(ボルゲーゼ美術館)。バッカスの顔色は土色で健康的なところがありません。馬に蹴られたあとの入院中に描いたともいわれます。いずれにせよ、ローマ神話の「酒の神」と自己を同一視するところがカラヴァッジョらしい。バッカスとは、ニーチェが『悲劇の誕生』で称揚する「ディオニュソス的なもの」の化身なのですから。

4) うぶな若者が二人のいかさま師のカモになっている様子を描いた〈いかさま師〉(キンベル美術館)。デル・モンテ枢機卿がこの絵をいたく気に入り、それがきっかけでカラヴァッジョに運が開けることとなります。なお、上記デレク・ジャーマンの『カラヴァッジョ』では、このデル・モンテ枢機卿もまた同性愛の傾向のある人物で、ローマの邸宅にカラヴァッジョを住ませたのはその下心があったからだ、ということになっています。

5) デル・モンテ枢機卿はみずからリュートを奏で、邸宅でコンサートを開くほどの音楽愛好家でした。その彼がとくに好んでいたのが〈合奏〉(メトロポリタン美術館)。デル・モンテ邸でのコンサートの様子が描かれています。4人の人物のうち、右から二人目の少年はカラヴァッジョの自画像である、と云われています。

6) この映画の中でカラヴァッジョは、ヤクザ社会の雄ラヌッチョ・トマッソーニにテニスの勝負を挑み、彼の情婦フィリーデ・メランドローニを絵のモデルにする権利を勝ち取る。彼女は〈アレクサンドリアの聖カタリーナ〉(ホロフェルネスの首を斬るユディット)などの作品のモデルであると云われています。

7) 1600年7月、カラヴァッジョはサン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂の一礼拝堂の中に〈聖マタイの召命〉および〈聖マタイの殉教〉の二点の大作を完成させました(デル・モンテ枢機卿の推挙によるもの)。これらの二点は、カラヴァッジョにとって初めての大きな公的作業であるとともに、それらの強烈な明暗法と写実性のゆえにバロック美術の幕開けを告げるものでもありました。

8) 街の娘レーナを聖母のモデルにしたと云われる〈ロレートの聖母〉(サンタゴスティーノ聖堂)は、その強烈なリアリズム描写のゆえに、後援者のデル・モンテ枢機卿からも叱責を受ける。教会の側からの批難にもかかわらず、この絵は大衆的な人気を博しカラヴァッジョの最高傑作の一つと見なされています。

9) 1606年、女性関係のもつれが原因で、カラヴァッジョはラヌッチョ・トマッソーニを乱闘の末に殺してしまいます。死刑宣告を受けてローマにいらなくなり、彼の逃亡生活が始まります。流謫の日々を過ごしながら彼の創作意欲は衰えず、彼を匿ってくれたコロナ家の領地ザガロロで〈マグダラのマリア〉や〈エマオの晩餐〉という傑作を描きました。

10) 1607年、コロナ侯爵夫人の息子ファブリツィオの率いる艦隊の船でカラヴァッジョはマルタ島にわたります。翌年には生涯最大の作品〈洗礼者ヨハネの斬首〉を描き上げて、これをマルタ騎士団に奉納し、その見返りとして「恩寵の騎士」という位階をあたえられたのです。



「洗礼者ヨハネの斬首」

11) そのあと、高位の騎士と喧嘩して投獄されますが、仲間の助けを借りて脱獄に成功し、シチリア島のシラクーザにわたり旧友のマリオ・ミニニティに再会したり、デル・モンテ枢機卿やコロナ侯爵夫人の献身的な努力によってヴァチカンの恩赦が下りて意気揚々とローマへの帰途につく、というぐあいに息もつかせぬ事件の連続ですが、ローマに帰る途中でアクシデントがあり、カラヴァッジョは熱病に冒されて、1610年7月18日、38歳の短い一生を終えます。まさに波瀾万丈の生涯を送ったわけで、これほどにシネマの素材にうってつけの絵描きはそうざらにはいないでしょう。

[この稿を書くに際して、映画『カラヴァッジョ 天才画家の光と影』のプログラム、および宮下規久朗著『カラヴァッジョへの旅 天才画家の光と影』(角川選書、2007)が大いに参考になりました。ここに記して感謝します。]

(京都大学名誉教授・フランス文学)

… 会館 だ よ り …

イタリア語 無料体験レッスン

7月より開講の夏期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 梅田: 大阪駅前第4ビル

7/4 (日) 13:00~14:30

7/4 (日) 15:00~16:30

7/6 (火) 19:00~20:30

● 四条烏丸: ウイングス京都

7/6 (火) 19:00~20:30

● 京都本校: 日本イタリア京都会館

7/3 (土) 11:00~12:30

7/3 (土) 13:00~14:30

7/6 (火) 11:00~12:30

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時: 7/8 (木) 15:00~16:30

会場: 日本イタリア京都会館 本校

講師: 当館スペイン語講師

ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時: 7/8 (木) 19:00~20:30

会場: 日本イタリア京都会館 本校

講師: 当館ポルトガル語講師

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>